

『シャーロット・ブロンテの生涯』 研究 (10)

『ブロンテ姉妹の父親』

芦 澤 久 江

1. はじめに

ギヤスケル (Elizabeth Cleghorn Gaskell, 1810-65) が『シャーロット・ブロンテの生涯』 (*The Life of Charlotte Brontë*, 1855) においてパトリック・ブロンテ (Patrick Brontë, 1777-61) を酷評したことはよく知られている。その後、ギヤスケルの描いたパトリック像は多くの伝記作家によって修正されたものの、現代に至るまで、パトリックのすべてが明らかになったわけではない。パトリックのアイルランド時代に関してはウィリアム・ライト (William Wright, 1837-99) が詳細にわたって解明したように思われたが、ライトの著書はのちに大きな波紋を呼び、彼自身が訂正せざるを得ないほど非難された。それでも研究者たちはパトリックの生涯に関して歴史を紐解き、わずかな資料からでも彼の痕跡を確認しようとしている。スクルートン (William Scruton, 1840-1924) がパトリックのソーントン (Thornton) 時代を調査し、出版した。一方イエイツ (W. W. Yates) は『ブロンテ姉妹の父親』 (*The Father of the Brontës*, 1897) において、パトリックのデューズベリー (Dewsbury) 時代、ハーツヘッド (Hartshead) 時代を調査し、パトリックがそこでどのような生活をしていたかを明らかにしようとした。イエイツはデューズベリーに残る教会の登録簿を調べたり、ブロンテを直接知る人々を通して、パトリックに関して地元で伝えられてきた話を紹介したりしている。そこで、拙論ではイエイツによって取り上げられているパトリックに関する記録、証言などを考察してみたい。

2. デューズベリーの歴史と司祭館

パトリックのデューズベリー赴任を述べる前に、イエイツの語るデューズベリーの歴史について見てみよう。デューズベリーが初めて土地台帳に載ったとき、そこはウェイクフィールド (Wakefield) に属し、エドワード王 (King Edward) のものであった (Yates 1)。しかしデューズベリーの歴史はさらに昔にさかのぼることができる。言い伝えではあるが、ローマの伝道者、初代ヨーク大司教で、のちにロチェスター大司教となる聖パウリヌス (St. Paulinus, d. 644) が、627年ここで説教をしたと言われている (Yates 2)。チャドウィック (Ellis H. Chadwick) によれば、サクソン時代の初め、現在のデューズベリー教会とほぼ同じところに十字架が立っていたと思われる (Yates 2)。¹ その証拠に十字架の一部がその場所で発見された。ところがその十字架にはルーン文字が刻まれており、キリスト教ではなく太陽崇拝に関連したものだったと考えられる。このよ

うにデューズベリーは古くから宗教的にも重要な場所であったのである。

ノルマン人が征服する以前から、デューズベリーは教区のなかで重要な役割を果たしていた。ハリファックス (Halifax)、ハダースフィールド (Huddersfield)、ブラッドフォード (Bradford)、アーモンドベリー (Almondbury)、カークバートン (Kirkburton)、ソーンヒル (Thornhill) 教区をデューズベリーが統括し、それらの教区が司祭の年収を支払っていた。ノルマン人が征服すると、ウィリアム王 (King William) はデューズベリーの屋敷を手放したが、1338年に司祭館は王のもとに戻され、その11年後に聖職者推挙権が制定された (Yates 4)。

デューズベリー教会の登録簿は1535年から始まっていて、これはイギリスのなかでもっとも古いものに分類される (Yates 4)。パトリックのデューズベリーでの在任期間は1809年から1811年である。ところがギヤスケルは、パトリックがウェザーズフィールド (Wethersfield) からハーツヘッドに赴任した (Gaskell 77) としているが、それは誤りである。² ショーター (Clement K. Shorter, 1857-1926) は、パトリックの赴任先はウェザーズフィールドからウェリントン (Wellington) であった (Yates 4) として、ギヤスケルの間違いを訂正している。³ すなわちパトリックはウェザーズフィールドからウェリントンを経て、デューズベリーへ転任することになったのである。

パトリックがデューズベリーに副牧師として赴任したとき、司祭館はすでにあった。ところがパトリックが赴任した後の時代、1889年に司祭館は倒壊したため、当時の面影を残しているのは檜の木でできた枠組みだけである。というのは議会時代に長老派の牧師が就任すると、居住者は追い出されてしまい、家も取り壊されてしまったからである (Yates 18)。当時、牧師館は一般的に、少なくとも二つの部屋、台所、馬屋、穀物倉、家畜小屋、その他牧師の必要に応じて部屋があり、その邸宅のまわりには広い庭と囲い地もあった。司祭館は近隣では立派な邸宅として知られていたであろう。

デューズベリーの司祭館もまたその例外ではなかった。邸宅の内部については、居間に大きな暖炉があり、ダイニングルームと朝食用の部屋があった (Yates 20)。朝食用の部屋の上にはバックワース (Rev. John Buckworth, 1779-1835) の書斎があり、そこで彼は説教や雑誌に関する記事を書いたり、讃美歌を作曲したりしていた (Yates 21)。バックワースは讃美歌をブラッドフォードのインカーズリー (F. Inkersley) という印刷屋から出版しており、その讃美歌集は1812年に12版まで重版されたほどであった (Yates 21)。バックワースはこの書斎で主食のオートミールを食べることも珍しくなかったが、日曜日だけはみんなで食卓を囲んだ。しかし彼は決して豪華な食事を許しはしなかったようである。

パトリックにも 'den' と呼ばれる私室があてがわれていたが、それは一世代前には執事の食糧貯蔵庫と呼ばれていた (Yates 20)。特にパトリックがお気に入りだった場所は庭や囲い地であった。パトリックは手に鉛筆を持ち、何か書き留めている姿がしばしば目撃されている。しかしパトリックは数か月すると司祭館を離れ、プリースト・レイン (Priest Lane)、現在のチャーチ・ストリート (Church Street) のエインシエント・ウェル・ハウス (Ancient-Well House) に下宿した。な

ぜパトリックはバックワースの許を離れ、下宿したのであろうか。バックワースは教会伝道師会の職を引き受けていた。すなわち彼は、聖職者として外国、特にインドへ赴任する若者を教育する仕事をしており、彼自身の家でカレッジを開校していたのである (Yates 38)。そのため手狭になった司祭館をパトリックは離れ、一人下宿したのだとイエイツは推測している (38)。

3. デューズベリーでのパトリック

パトリックは1806年に聖職位を授けられ、1809年までウェザーズフィールドの副牧師だった。イエイツが司祭であるマーシュ＝エドワーズ (Marsh-Edwards) に問い合わせをした結果、パトリックはウェリントンに約1年間在職していたということがわかったという。イエイツがこの著書を書いたとき、パトリックがウェリントンにどれだけの期間、在任していたのかは明らかになっていなかった。したがってイエイツが地元の司祭に問い合わせをして、パトリックがおおよそ1年間ウェリントンに滞在していたということを発見した功績は大きい。現在の研究では、パトリックがウェリントンに在職していたのは、1809年1月初めから1809年12月初めまでとされている。

デューズベリーの名簿には1809年12月からパトリックが任務を始めた記録が残っている。12月11日、パトリックはジョン・シニア (John Senior) とエレン・ポプルウェル (Ellen Popplewell) の結婚式を執り行い「P.ブロンテ 副牧師」(‘P. Bront curate’) とサインしている。一方、埋葬に関しては、埋葬日、故人の名前、故人が所属していた教区のイニシャル以外、埋葬に関する記録は残されていない。⁴

デューズベリーで、パトリックは副牧師としてどのように職務を果たしていたのであろうか。パトリックは ‘three-decker’ と呼ばれる説教壇から説教を行っていた。厳しい顔つきをしていたが、多くの信徒からパトリックは好かれていたようである。なぜなら彼は教会の内だけでなく外でもまた、大変熱心だったからである。パトリックは子どもたちに日曜学校で教えたり、教義問答をしたりするのが好きで、月に一度は行っていた。また ‘cottage meeting’ という集会を開き、民家の居間に集まり、信徒とともに熱心にお祈りをしたようである。

パトリックは政治において急進的見解をもっている人々からは好かれていなかった。そのような人々はアイルランド人の聖職者を下に見る傾向にあった。このような見方は彼がウェザーズフィールドに在任した間にも土着の人々の間に垣間見られた。牧師ハリリー (Halliley) が語ったところによると、パトリックはトーリー党でありながらも、労働者階級に同情していたので、デューズベリーの裕福な人々やリーダー的存在の人たちと親交を深めようとはしなかった (Yates 27)。

しかしイエイツはこれについて概ね事実としながらも、パトリックがそのような人々とまったく交際をしていなかったわけではないと述べている (28)。イエイツはデューズベリーの前市長、マーク・ニューサム (Mark Newsome) に手紙を書き情報を得ようとしたところ、彼から次のような返事を受け取っている。

I have often heard my mother speak about the clergy calling at Nab End, the residence of my grandfather, Mr. Marmaduke Fox. He always spoke of Mr. Brontë as a very earnest man, but a little peculiar in his manner. My father, Mr. T. Newsome, and my uncle, Mr. Joseph Newsome, of Batley Carr, were well acquainted, and indeed intimate with Mr. Brontë. (Yates 29)

このように、パトリックはデューズベリーにおいて、裕福で影響力をもった人々と交流し、デューズベリーを去ってからもときどきお互いの家を訪問していた。特にデューズベリーで司祭をしていたバックワース夫妻とは、パトリックが結婚してからも交流は続けられていたのである。

デューズベリーにパトリックが滞在していた期間は2年足らずであったが、彼に関する英雄的エピソードが幾つか地元の人々によって語り伝えられている。まず、最初の出来事は、パトリックが司祭館を出てダム近くにやって来たときのことである。子どもたちが水遊びをしていたが、そのなかに年長で知恵遅れの子どもがいた。子どもたちは遊んでいるうちに、その知恵遅れの子どもを半ばいじめるようにして、水の中に落ちた靴を拾うように体を押した。そしてその子どもは水の中に落ち、溺れてしまったのである。子どもたちの叫び声を遠くから聞きつけたパトリックは急いでやって来ると、溺れている子どもを助けあげたというのである。その後パトリックは子どもを家に送り届けると、ほかの子どもたちには謝るように説いて聞かせた。しかしパトリックは決して誰が悪いかということは迫及しなかったのである。

別のエピソードはこうである。パトリックが礼拝を終え、司祭館の書斎で休んでいると、教会の鐘楼を鳴らすコンテストのために人々が練習しようとやって来た。ところが鐘を鳴らす音を聞いたパトリックは棍棒を持って鐘楼に上がって行き、すぐに鐘をつく練習を止めるように言った。パトリックは安息日に鐘の練習をするなど、神への冒瀆であるとして決して許しはしなかった。その行為を黙認していた庶務係のスミスも叱られた。

翌日彼らはふたたびパトリックのところにやって来て、練習をなぜしてはいけないのかと迫ったが、パトリックは断固として意見を曲げることはしなかった。そのためそのうちの一人の振鈴者はパトリックが謝るまで、二度と鐘楼には戻らないと言い、彼はその約束を守り二度と鐘を鳴らすことはせず教会も辞めてしまった。ところがその後、彼はまた戻って来て、以前とは違って信心深い信徒となったのである。パトリックがこの事件の際に握りしめていた棍棒は、彼のお気に入りだったと言われており、ハーツヘッドでも持っていた。また彼が棍棒を大事にしていたことから、まわりの友人たちは彼を 'old staff' と呼んでいたのである。

三番めのエピソードもまた、溺れた子どもを助けたエピソードと同様に、パトリックの勇敢さを証明するものである。1810年聖霊降臨節の月曜日あるいは火曜日に、デューズベリー教区の日曜学校の生徒、教師が列になってアールシートン (Earlsheton) へ向かっていたとき、背の高いがっちりした男が道をふさいでいた。彼は泥酔しており、少女には罵声などを浴びせていた。子どもたちの叫び声を聞いたパトリックは、その男の襟ぐりを掴んで投げ飛ばし、人々は何の危害も与えら

れずにすんだというのである。ここに登場した無法者とはオセッ (Ossett) の町の小村ゴーソープ (Gawthorpe) から来た者であった。彼は悪名高い闘鶏家でもあり、ボクサーでもあり、酒浸りだったと言われている。シニア (Senior) はパトリックの日曜学校の生徒の一人で、彼は実際にパトリックがその無法者と道路で闘っているのを見たと言っている (Yates 46)。またデューズベリーの文具商、サミュエル・ドーソン (Samuel Dawson) もこの事件を目撃した一人であった (Yates 47)。さらにウィルソン・ヘミングウェイ (Wilson Hemingway) の母親は当時11歳だったが、この出来事を目撃し鮮明に憶えていたので、自分の子どもたちに何度も話して聞かせていた (Yates 48)。イエイツは、『シャーリー』(Shirley, 1849) の一場面、すなわちヘルストン (Helstone) が気に障る人物を溝に投げ飛ばすという場面は、アイルランドに伝わるエピソードからではなくデューズベリーで起こったこの事件をヒントにシャーロット (Charlotte Brontë, 1816-55) が作った可能性が高いと主張している (49)。

もう一つのエピソードもまたパトリックの正義感を証明するものである。デューズベリーにトマス・ノウエル (Thomas Nowell) の息子で、布織り職人であるウィリアム・ノウエル (William Nowell) という若者がいた。彼は9月25日 (月)、第30師団から脱走した罪で収監された。この発端となったのは、第30師団に入隊し、ウェイクフィールドに駐在していたジェイムズ・サッカレー (James Thackeray) という男による証言だった。サッカレーによれば、9月18日 (月) ノウエルはウェスト・アーズリー (West Ardsley) 教区のウッドチャーチ (Woodchurch) で行なわれたリー・フェア (Lee Fair) で入隊したが、脱走したのだという。それを裏付ける証言として、ノウエルの知り合いの娘は、ノウエルが入隊した代りにお金をもらったということを知っていたと述べている。確かにサッカレーがノウエルにお金を渡したなら、ノウエルは本部に姿を現さなければならなかった。ところが彼が本部に来なかったため、使いを出すと、彼は家にいて、入隊などしていないと主張した。彼はアリバイがあるので、無実を証明できると訴えたが、翌日逮捕された。彼はウェイクフィールドに連行され、治安判事であるドーソン (Mr. Dawson) の前に引き出された。サッカレーはノウエルが入隊したと主張したが、ノウエルの父親は7人の証言者を集め、ノウエルを弁護しようとした。それでもノウエル側の訴えは認められず、さらに別の証言者を呼んだが、ドーソンはそれを拒否し、ノウエルを矯正院に入れてしまったのである。

デューズベリーにその知らせが伝えられると、住人たちに驚きと失望が広まった。そしてデューズベリーの主だった4人 (このうちの一人がパトリック) がドーソンを訪問し、考え直してほしいと促したが、結局それも拒否されてしまった。その結果、聖職者、教区員、デューズベリーの主な住人たちは陸軍大臣に請願書を送ることになったのである。

このときの陸軍大臣はロード・パーマストン (Lord Palmerston, 1784-1865) であった。パトリックはケンブリッジ時代にフランス軍の侵入に備えイギリスが戦闘態勢だったとき、志願兵となったが、そのときパーマストンがパトリックの入隊した部隊の指揮を執っていたのだった。ケンブリッジを卒業後、パトリックは聖職者の道へ、パーマストンは政治家の道に進んだのである。

請願書の返事としてパーマストンからパトリック宛てに返事が来たが、大臣が治安判事の決断に

介入できるかわからないという主旨のものであった。これを受けて、人々の関心はますます高まり、陸軍省へ直接行くべきであるという結論に至った。そこで陸軍省に出向いて行ったのは、デューズベリーの工場主ハリリー（Mr. Halliley）とウィルバーフォース（William Wilberforce, 1759-1833）であった。実はウィルバーフォースはパトリックがケンブリッジ時代に世話になったスポンサーで、この事件を『リーズ・マーキュリー』（*Leeds Mercury*）によって知り、積極的に活動していたのである。

ウィルバーフォースは二度も陸軍省を訪れ、ようやく治安判事に事件を調べ直させることに成功した。パトリックたちは15人の証言者を連れてドーソンに会い、目撃者は一貫した証言を行なった。結果としてそうした証言のおかげでノウエルは釈放されたわけだが、なぜこれほど多くの人々が彼のアリバイを裏付けることができたのであろうか。

これにはデューズベリーで起こった別の事件が関わっている。リー・フェア（馬の品評会）の日 は休日であった。ノウエルの両親は1時ころ、そのフェアに出かけたが、ノウエルは機織りの仕事を3時まで続けた。その後、ノウエルは、検死なしに埋葬されたジャクソン（Mr. Jackson）の遺体が掘り起こされるという騒ぎを聞きつけた。

ジャクソン事件はデューズベリーの誰もが知っていた。彼の遺体がふたたび掘り起こされることになった経緯は次のようなものである。ジャクソンは麻薬を飲んで興奮状態となり、礼拝のドアが開いたのを見ると、そこへ馬にまたがったまま入ろうとした。すると彼は捕らえられ、監獄に入れられた。ジャクソンの妻はそのときウエイクフィールドで、姉妹の葬儀に参列していたが、夫が捕らえられたことを知ると、デューズベリーに戻る際に病気になり亡くなってしまった。一方、それを知ったジャクソンもショックのあまり、死んでしまうという二重の悲劇が起こったのである。

残された記録によると、8月5日（日）に妻が埋葬され、8月14日（火）には夫も埋葬された。遺体が埋葬されると、人々はジャクソンが毒を盛って自殺したのではないかと噂しはじめた。こうした噂を収拾するために、遺体を掘り返し検死がなされた。結局、検死の結果、ジャクソンの死は自殺ではなく、自然死であったということである。

このような事件が起こったため、人々が遺体の掘り起こしに関心を持ったのも当然のことである。それだけいっそう、その日のことはデューズベリーの人々にとっては記憶に鮮明に残っていたにちがいない。ノウエルは機織りを終え、ジャクソンの遺体の掘り起こしがあると聞き、人々とともに教会へ向かった。ところが6時までは遺体が引き上げられないということだったので、ノウエルはマーケット・プレス（Market Place）に行き、さらにハリリーの工場を訪れていた。そのため多くの人々がノウエルを教会で、またマーケット・プレスで、そしてハリリーの工場で見撃しており、彼のアリバイを証明することができたのである。

ようやくノウエルは無罪となり、偽証を行なったサッカレーは1810年9月18日（火）にヨークの裁判所で裁判を受け、7年の島流しとなった（Yates 63-4）。釈放されたノウエルはデューズベリーの毛布製造工場で生涯働き続けた。

ノウエルの釈放にパトリックが大きな役割を果たしたことは前述したとおりであるが、ノウエル事件後、パトリックが『リーズ・マーキュリー』にシドニー（'Sydney'）というペンネームで、事

の顛末を述べた手紙を送っていたとイエイツは述べている (53)。シドニーは手紙の最後を次のように締めくくっている。

It is proud reflection and a source of consolation in these times that, while the iron hand of despotism is falling heavy on the continent of Europe, we Englishmen still enjoy the pure administration of justice; that we have laws to regulate the conduct of every man, from a beggar to a king; and that no station, however low, no rank, however high can screen from justice him doeth wrong. (Yates 62)

上記の手紙から、地位の低いものであれ、高いものであれ、間違った判断は正されるイギリスの法律を誇らしく思っている様子が伺え、パトリックの正義に対する精神が書かれているようにも思われる。しかしバーカー (Juliet Barker) はシドニーがパトリックのペンネームだったというイエイツの主張には懐疑的で、次のように述べている。

There would be no point in going to the trouble of adopting a pseudonym, then giving away the identity by including a letter addressed to the 'Rev. P. Brontë' at the end, unless the pseudonym belonged to someone else, Patrick never used a pseudonym in any of his other correspondence with newspapers, partly because his title gave him the right to comment on public affairs. The letter does not appear to me to have some of characteristic traits of Patrick's writing, the most obvious omission being quotation from Scripture, nor would Patrick have written 'we Englishmen' as he was always proud of his Irish ancestry. (842 n. 30)

バーカーは、パトリックが雑誌に投稿するときに一度も偽名を使ったことはなかったし、ここで偽名を使う必要性がない、またアイルランド人であることを誇りにしていた彼が「わたしたちイギリス人は」('we Englishmen') と決して書かなかったであろうと主張している。また手紙にはパトリックの手紙の特徴や聖書の引用などもないと反駁している。

確かにバーカーが述べているように、イエイツの主張にはほとんど証拠がない。イエイツは、シドニーの手紙のあとにパーマストンからパトリック宛てにきた手紙も添えていることを唯一の証拠にしようとしているが、バーカーが述べているように、最後に身元を明かすくらいなら、偽名など使うことはない。しかし現在ではそのほかに資料が残されていないので、この問題に関してもはや言及することは不可能である。いずれにしてもパトリックは地元の人々、ケンブリッジ時代の知人とともに、ノウエル事件に大きく関わり、問題を解決したということは確かな事実である。

これまで見てきたように、デューズベリーでは、パトリックの性格だけでなく、さまざまなエピソードが語り伝えられている。子どもをダムから助けたこと、道を塞いでいた男を殴り飛ばしたことは、パトリックが危険を顧みず己を犠牲にしても勇敢に立ち向かう人物であったことを証明す

るものである。またノウエル釈放に尽力した点はまさにパトリックの正義感の強さを物語っている。ところが棍棒をもって鐘楼に上がったパトリックをどのように人々は解釈するであろうか。職務に忠実であったことは明らかであるが、棍棒をもって鐘楼に突進してくるパトリックの様子は村人にいささか風変わりな感じを与えたのではないであろうか。ノウエル事件を除いて、すべてのエピソードが事実であったかどうかはわからないが、どの話にも共通している点はパトリックが情熱的で、気性が激しく、正義感に燃えていたということである。デューズベリーで、パトリックは彼の職務を真面目に果たしていただけでなく、ノウエル事件に見られるように地域の人々と深く関わっていただのである。

4. ハーツヘッドでのパトリック

パトリックはデューズベリーからハーツヘッドへ転任したのであるが、その転任する少し前に彼の風変わりさを伝えるエピソードがある。当時ハーツヘッドの司祭はルーカス (Rev. W. H. Lucas) であったが、彼は病気がちで、たびたび職務を行なうことができないでいた。そのためデューズベリーのパトリックが代りに日曜日の朝と晩の礼拝を行なうことになった。というのはバックワースがその日は妻の親戚、ハリリー家のオールダムズ (Aldams) で過ごしたいと言ったからである。パトリックはその日曜日の朝、彼が選んだ教区書記ジョウゼフ・トルソン (Joseph Tolson) を伴い、ハーツヘッドまで出駆けて行った。帰りがけに二人は雨と嵐に遭い、ずぶ濡れになってしまったため、バックワースに晩の礼拝をお願いするためオールダムズへ向かった。するとその話を聞いたハリリーはパトリックに向かって「自分がすべきことを人にやらせようとするなんて」と言った。パトリックはその場を無言で立ち去ったが、明らかに侮辱されていると感じていたにちがいない。トルソンはパトリックと別かれ家に戻り着替えをしてから、教会に向かった。するとすでにパトリックは教会にいて、何事もなかったかのように落ち着いた様子だった。礼拝がいつものように始まり、讃美歌を歌い終わると、パトリックが説教壇に立った。すると彼はここで説教をすることはもう二度とないと信徒の前で宣言したのである。その理由などの詳細はまったく述べられなかった。そしてパトリックは彼の言葉どおり、二度とそこで説教をすることはなかった。この出来事についてはパトリックとともにハーツヘッドへ出向いたジョウゼフ・トルソンの孫と義理の娘がイエイツに語ったものである (746)。

トルソンが孫や義理の娘に語ったこの出来事については事実かどうかわからない。バーカーは、次のように述べている。

Though there may be some truth in the story, Patrick was in no position to withdraw from the pulpit: had he done so, Buckworth could have terminated his curacy and would certainly not have promoted him to the living of Hartshead, when it came vacant, or maintained his friendship with Patrick afterwards. Nor it is likely that Patrick would have continued on good

terms with John Halliley, junior, if he had quarreled with his father and brother-in-law. (35)

バーカーが述べているように、もしパトリックが説教壇から降りてしまったら、バックワースとの友人関係は解消されていたであろうし、それどころかハーツヘッドへの昇進についてバックワースが認めなかったであろう。またこの後に起きたノウエル事件の際に、パトリックはハリリーと力を合わせて問題を解決しようとしなかったにちがいない。だが、バーカーは次のような可能性も否定はしていない。

It is possible, however, that Patrick took offence at what was meant to be a jocular remark and, in the heat of moment, threatened never to preach again. His promotion to Hartshead soon afterwards might have been constructed by Tolson as a fulfillment of his threat. (35-6)

バーカーはパトリックが二度と説教壇には上らないと脅して、ハーツヘッドの職を得たという可能性を示唆しているが、この説はどうであろうか。正義を重んじるパトリックがそのような手段をつかって、昇進しようとしたとは思われない。バーカーの説が事実であったかどうかはわからないが、この後パトリックはハーツヘッドで聖職の地位を得て転任するのである。

前述したトルソンはパトリックがデューズベリーからハーツヘッドに移ってからも交流が続いていたが、彼はパトリックについてかなり控えめだが知り合いの人々とは楽しくおしゃべりをする一方で、見知らぬ人の前ではぎこちなかったと述べている。パトリックはアイルランドからヨークシャーの地にやって来て、彼なりに交流の輪を広げていたが、モリス (Rev. M. Morris) は『ヨークシャー民話集』 (*Yorkshire Folk-Talk*) のなかで、アイルランド人とヨークシャー人の違いについて興味深い見解を述べている。

It is difficult to understand natures more opposite than those of the Irishman and Yorkshireman; the quick, impulsive, excitable temperament of the Celtic character is utterly foreign to that of the Clevelander, or the West Ridinger. A more practical people do not exist than Yorkshire people. (Yates 78)

アイルランド人とヨークシャーの人々はそれぞれ相容れない性質をもっていたようである。しかしパトリックの熱心な仕事ぶりや実際にデューズベリーで示した勇敢な行ないがヨークシャー人の心を開かせたにちがいないのである。前述したように、ギヤスケルの伝記では、パトリックの風変わりな点ばかりが強調されたために、まるで彼には友人もなく孤独な生涯を送ったように思われていた。ところが、パトリックの足跡を掘り起こしていくと、ケンブリッジ時代から、また聖職の地位に着いてからも、パトリックは多くの友人と親しくなり、身分の隔てなく交流を続けていたことがわかる。確かにパトリックには風変わりなところはあったと思われるが、それは多分アイルラ

ンド出身であったことに起因していたのではないであろうか。モリスが述べているように、情熱的ですがすぐに感情を剥き出しにするケルトの性格は、实际的なヨークシャー人にしてみれば、奇妙に思えたのも当然だったのである。

パトリックがハーツヘッドに移り住んだとき、彼には教会と墓地しかなかった。そのセント・ピーター教会(St. Peter's)はのちに修復されたが、パトリックが赴任したときはみすばらしい構えで、司祭館も用意されておらず、信徒も多くはなかった。1729年にカークリーズ(Kirklees)の準男爵ジョン・アーミテイジ・バート(John Armytage Bart)が建てたグラマー・スクールはあったけれども、学校も牧師館も不足していた。したがって、パトリックは独身時代にソーン・ブッシュ・ファーム(Thorn-bush farm)にあるベッドフォード夫妻(Mr. and Mrs. Bedford)宅に下宿していたが、マライア(Maria Branwell Brontë, 1783-1821)と結婚してからはハイタウン(Hightown)のクラフ・レイン(Clough Lane)に引っ越しをした。彼らは12月29日(火)に結婚し、翌年の1月初めからここで結婚生活を始めた。二人の結婚については1813年『ジェントルマンズ・マガジン』(*Gentleman's Magazine*)の179ページに報告記事が掲載されている。

パトリックの名前がハーツヘッドの登録簿に初めて登場するのは、1810年3月31日で、パトリックが洗礼を行なったサインが残っている(Yates 88)。しかしこれはパトリックがまだデューズベリーの副牧師をしていたときのものである。おそらくハーツヘッドの司祭ルーカスが健康上の理由で職務を全うできないため、パトリックが代りに行なったものと思われる。結婚式をパトリックが行なったのはその17ヵ月後の1811年8月25日(日)で、ヘンリ・テイラー(Henry Taylor)とレイチェル・ケイ(Rachel Kay)の結婚式であった。登録簿によると、1811年から1812年の間に14回の結婚式があった(Yates 88)。

パトリックがハーツヘッド在任中に特筆すべき出来事が起こった。1812年4月11日(土)、ハーツヘッド近くのローフォーズ(Rawfords)にあるカートライト(William Cartwright, 1775-1839)の工場が労働者たちによって襲撃されたのである。これはいわゆるラダイツ運動と呼ばれるもので、のちにシャーロットが『シャーリー』で詳しく描いている。この暴動をきっかけにパトリックは、棍棒ではなく、ピストルを常時持つようになったといわれている。結局、暴動は最悪の流血事件となって、ハダーズフィールド近くのマーズデン(Mardsden)のホースフォール(Horsfall)が殺害された。この事件によって66名が糾弾され、17名が処刑された。トマス・アトキンソン(Thomas Atkinson, 1780-1870)が語ったところによると、死刑が執行された後、夜になって密かに何人かの遺体がハイタウンに持って来られ、墓地に埋葬された。内密のうちに埋葬がなされたといっても、埋葬に立ち合った人々の足跡、掘り起こした土などを見れば、昨晚墓地で何かが起きたことは明らかである。ところが副牧師であったパトリックはそれをわかっていながら黙認したというのである。アトキンソンのこの話は少し脚色がなされていると思われる。

ピール(F. Peel)の『ラダイツの暴動』(*The Rising of the Luddites*)によれば、ハダーズフィールドでは暴動に関わり処刑された者の埋葬は決して内密にはされていないという(Yates 93)。それどころか町ではデモが起きたほどである。ラダイツ事件は流血騒ぎとなったが、処刑された者

に対して人々は同情的だった。なぜなら叛乱を起こした労働者たちの労働条件が劣悪だったからである。

こうした事情から、ハーツヘッドだけ処刑された者の遺体が内密に埋葬されたと考えるのは不自然である。おそらくアトキンソンがパトリックの印象を良くしようと誇張したのであろう。つまりパトリックがラダイツ暴動を起こした人々に断固とした態度をとりながらも、内心では同情していたということをアトキンソンは言いたかったのかもしれない。

パトリックはこの暴動のあとで、ピストルを携え、緊迫した状況のなかで生活を送ることになるが、思いもかけずその後ソーントンのアトキンソンの申し出を受け、彼と聖職禄を交換し、ハーツヘッドを去るのである。

5. おわりに

パトリックはデューズベリーにおいて、さまざまな英雄的逸話を残している。これらの話がすべて真実であるかどうかはわからないが、それらは彼の性格を表しているように思われる。また彼にとってデューズベリーでは多くの出会いもあった。特に、デューズベリーの司祭であったバックワースはパトリックが生涯にわたって交流を続けた重要な人物であった。さらにノウエル事件で、パトリックは彼のケンブリッジ時代の知人ウィルバーフォースに助力を要請し、さらには陸軍大臣であったパーマストンに手紙を書きもした。そうしたことによって、パトリックはアイルランド人でありながらも、デューズベリーの人々から信頼と尊敬を勝ち取った。それゆえ彼を称えるエピソードが残されているのである。

これまで見てきたように、イエイツはショーターでさえも知り得なかったパトリックの情報を入手している。1897年までに、デューズベリーでのパトリックについてこれほど調べあげたイエイツの功績は大きい。現代においてバーカーが伝記の洗い直しを行なったが、そのバーカーでさえ、デューズベリー時代のパトリックのエピソードはイエイツの著書に依拠している部分が多い。このことはイエイツがまとめた情報がいかに貴重なものであるかを明らかに示すものである。

注

1. イエイツはチャドウィックを情報源として述べているが、出典を示していないので、チャドウィックがどこでそのような記述をしているのか不明である。チャドウィックの著書『ブロンテ姉妹の足跡を求めて』(*In the Footsteps of the Brontës*, 1914) は1914年の出版であり、彼女が特にブロンテに関して言論界で活躍したのは1910年代になってからである。わたしが調べた限りでは、イエイツがこの著書を書き表す1897年以前に、チャドウィックが新聞、雑誌にブロンテ関連の記事を投稿している、あるいは作品を書いているということはない。
2. イエイツは、ギヤスケルがパトリックはウェザーズフィールドからハーツヘッドに赴任したと

誤って記述していると述べているが、正確にはギaskellはウェザーズフィールドからヨークシャーへ赴任したと書いていて、詳しい地名は述べていない (Gaskell 77)。

3. イエイツによると、ショーターは、パトリックがウェザーズフィールドからウェリントンへ赴任したとしてギaskellの誤りを正したとされている。しかしショーターは、パトリックはウェザーズフィールドからデューズベリーに赴任したと述べており、ウェリントンの記述はすっかり抜け落ちている (Shorter 30)。
4. バーカーによれば、パトリックは1年4か月の間におよそ130組の結婚式を一人で行なった。また埋葬については当初は1ヵ月平均20件であったが、チフスやインフルエンザの大流行により急激に上昇し、パトリックの任務は多忙をきわめた (33)。

引用文献

Barker, Juliet. *The Brontës*. London: Wedienfield and Nicolson, 1994.

Chadwick, Esther Alice. *In the Footsteps of the Brontës*. London: Sir Isacc Pitman & Sons, Ltd., 1914.

Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. Penguin Books, 1987.

Scruton, William. *Thornton and the Brontës*. Bradford: John Dale & Co., 1898.

Shorter, Clement K. *Charlotte Brontë and her Circle*. London: Hodder & Stoughton, 1896.

Yates, W. W. *The Father of the Brontës*. Leeds: Fred. R. Spark and Son, 1897.

Wright, William. *The Brontës in Ireland*. London: Hodder & Stoughton, 1891.